



僕の自慢の美人妻が

後輩に寝取られました

午前央人

潮見達也には自慢の美人妻がいた。彼女の名前は美香。幸せな二人の間に、ある日闖入者が紛れ込んてくる。男の名は羽鳥矢太郎。達也の後輩である矢太郎には、とある目的があった。

僕の自慢の美人妻が後輩に寝取られてまして

## 序章 僕の自慢の美人妻

「いってらっしゃいませ」

「ああ。いってきます」

ごくありふれた言葉を交わして、玄関の内と外に別れるひと組の夫婦。

旦那の名前は潮見達也。

妻の名前は潮見美香。

妻の方がほんの少しだけ年上の、特にこれと言った特徴はないどこにでもいそうな美男美女のカップルだった。

「さてと、それじゃあお掃除しちゃうかな」

仕事に出る旦那を見送った妻の美香は、扉にしっかりと鍵を掛けてからリビングを通り抜け、キッチンへと戻った。

まずは、朝食の後片付けからはじめるようだった。

「ふんふんふふーん♪」

ほんの少しだけ調子外れな何かの曲をハミングしながら、手早く食器を洗っていく美香。旦那の使った皿やペアのマグカップ、二人色違いで揃えた箸、料理に使った鍋やボウルを洗剤をつけたスポンジで擦り、流水で泡をすすいでいく。

「これでおーわりっと」

キュッと蛇口を締めて、軽く手を振って水気を切る。

タオルでしっかりと手を拭いたあと、洗い終わった食器たちを乾燥機に並べていった。「これ洗う機能もついてることはついてるんだけど、なんとなく自分で洗わないと綺麗になつた気がしないのよね」

少し変わった部分にこだわりのある美香だったが、ものすごく几帳面であるとか、潔癖症であるとか、そういったことはなかった。

ただ、自分的なルールがなんとなくある。

誰かに強制したりとかそういうことはほとんどなかったが、自分の中でルーティンを作って行動するタイプ。

そのあたりは、旦那である達也にも共通する部分があった。

達也と美香。

二人は、あまり今風な感じで出会って結婚したわけではなかった。

学生時代の知り合いでもなかったし、幼なじみ同士でもない。

マッチングアプリで知り合ったわけでもないし、SNSで繋がったわけでもない。

二人は、親同士の紹介で知り合った。

そしてお見合いというわけではなかったが、顔合わせという名目で食事会が設けられ、

そこから結婚を前提とした交際がスタートした、ある意味ちよつと古い感じのルートを通じて結婚までたどり着いた二人だった。

「次はお洗濯っ」と

キッチンをあとにして、次の作業へと向かう美香。

途中ベッドルームに立ち寄り、ランドリーバスケットを回収して脱衣所へと到達する。

色物や柄物、デリケートな衣類などを取り分け、洗剤と柔軟剤の残量を確認してから全自動洗濯機に放り込む。

これであとは待つだけ。

昔と比べてずっと楽になったと、実家が2槽式洗濯機だった美香はしみじみと思った。洗濯機を回している間、浴室とトイレの掃除をする。

適当な部分と凝り性な部分が同居している美香は、最近浴室の蛇口磨きにハマっていた。自作のクエン酸水とそれ用に準備した歯ブラシを使って、ピカピカに磨き上げる。

自分の顔が映るほどの輝きを取り戻したところで、彼女は満足げに笑みを漏らした。

「そろそろかな」

ずっとかがみ込んでいて固くなった腰をグーッと伸ばし、軽くトントンと叩いてから洗濯機のところへと戻る。

年齢より若く見えるとはいえ、彼女もうアラサー。

小柄で顔が小さく、身長さえあればモデルとしてやっていけると昔はよく言われたが、最近は見えない部分に少しずつ肉がつきはじめていた。

しかもそれらは、かなり落ちにくい。

「ほい、これはこっちで、次はこっちを……」

洗濯機の中身を入れ替える。

洗い終わった第一陣は空になったランドリーバスケットに入れ、それと入れ替えるように第二陣を洗濯機の中に放り込む。

洗濯機のスイッチを入れて、回り始めた洗濯槽を確認する。

そのままずっとぐるぐる回る洗濯槽を眺めているのも好きだったが、今は干さなければいけない洗濯物があつた。

美香はランドリーバスケットを抱えてベランダへと向かう。

彼女の家の全自動洗濯機には乾燥機能もついていたが、彼女は晴れている日には外で干す派だった。

少し手間はかかるが、そちらの方が気持ちいい気がする。

食器洗いにおける彼女のルールとは真逆になっていたが、彼女の的には矛盾してはいなかった。

そもそも何かしらの根拠があつてのマイルールではなかったし、単なる気分的な問題。

逆にした方がいいと旦那あたりに、ちょっとした裏付けを伴った説得をされればすぐに彼女はそれに従っただろう。

そのくらいのも、ごく軽いこだわりだった。

「パンパンパンと」

バスタオルを大きく広げて物干し竿に掛け、手で叩いてシワを伸ばす。

小さめのハンカチやフェイスタオルは、ジャラジャラと洗濯ばさみがたくさんぶら下がった角ハンガーにまとめて干した。

そうして洗濯して干して洗濯して干してを何度か繰り返す。

その間にもこまめに窓を拭いたりゴミを片付けたり、彼女は彼女なりのルーティンに従って家の中を片付けた。

これが、旦那が出かけてからの彼女の午前の主な過ごし方だった。

一方、旦那である達也の方は――

「ここのコード書いたの誰？ 例外処理出てるよ」

「あっ、すみませんっ」

人間の数よりもパソコンのディスプレイの方が多様な職場で、画面に表示された細かい文字を目を細めながら厳しくチェックしていた。

「この間上から降りてきたアレ、進捗どうだ？ 間に合いそうか？」

「いやー、厳しいですね。あそこまで仕様変更されると、ほとんどゼロから組み直しです  
から」

「やっぱりそうなるよな。わかった。あとで納期の方掛け合ってみる」

「ありがとうございます」

今年で入社四年目ながら、すでに何人かの部下を使う立場になっている達也。

とはいえ別に出世コースに乗っているとか、将来の幹部候補であるとかそういったわけ  
ではなかった。

チームで仕事をすることの多い彼の会社では、毎年入ってくる新入社員の指導役にそれ  
以前の年の新入社員を指定する。

つまりは退職（もしくは何らかの大きなミス）をしない限りは、一年ごとに一人の部下  
が増え続けるというシステムになっていた。

「先輩、これ確認お願いします」

その中でも達也と一番付き合いの長い部下……羽鳥矢太郎が、達也にコードのチェック  
を求めてきた。

達也は椅子ごと彼のデスクまで移動し、縦長に配置された矢太郎のディスプレイで上か  
ら順に彼の書いたコードを見ていく。



誰に聞かせるでもなくブツブツと小声でつぶやく達也。

彼の頭の中で矢太郎の書いたコードが、擬似的に処理されていく。

そして最後の一行まで行ったところで、達也の指が画面のある部分を触れるか触れないかのギリギリの距離で指差した。

「ここ、クローズされてない。処理的には問題ないかもしれないけど、念の為閉じておいて」

「わかりました」

スラツと細身の達也と、小太りでずんぐりむっくりした矢太郎。

見た目は対象的な二人だったが、仕事のときはもちろん、それ以外するときにも一緒に行動することが多かった。

というのも二人は、同じ大学の同じサークルの出身だったからだ。

「先輩、来週の飲み会顔出しますか？ 学祭のステージイベントについて話し合いたいらしいです」

「行くわけないだろ。卒業してまでなんで運営側の手伝いしなきゃならないんだ」

「ですよー」

「そもそも俺はジャンル違いだ。学祭のステージイベントって、そっちのアレだろ？」  
作業のための手を動かしながら話し続ける二人。

指示代名詞が多いのは、二人の関係がそれだけ深いことの証明なのだろう。

「そうなんですけど先輩、人使うのうまいから。だからあいつらも頼りたくなっちゃうんですよ」

「それは自分が楽したいからだ。あいつらも楽したいんだったら、他人をうまく使うことをとつと覚えろ」

「ははっ。なるほど」

そうこうしているうちに、昼休憩の時間を迎える。

キリのいいところまで作業した二人は、チームの他のメンバーとも連れ立って社員食堂へと向かった。

といっても達也の昼飯は美香の作ってくれた愛妻弁当。

チームのメンバーたちはA定食やB定食、定番のカレーや鴨南蛮。

いかにも社食で食べるメニューを自分たちの前に並べながら、達也へと羨望の眼差しを注いでいた。

そのころ、マンションで一人旦那の帰りを待っている美香の方は――

「おほほっ。あなたのそういうところよ、日向さんの奥さん」

「えー、そうかしら。あなたは どう思います？ 潮見さんの奥さん」

「え、ええええ。私ですかあ？」

唐突に訪れてきて至極当然のように居座っている同じマンションのママさんたちにいろいろな意味で圧倒されていた。

「あらあら、ごめんなさいね。そういえば潮見さんは、お子さんまだでしたよね」

「そうですよ、乃木さんの奥さん。これは、子供ができてみないとわからない苦勞ですから」

「そうですよね、日向さんの奥さん」

「あ、あはははは……すみません」

マンションのようにしゃべり続ける二人の女性。

潮見家の一つ下の階に住む、日向家と乃木家の奥様たちだ。

いつもならここにもうひとり、八木家の奥様も加わるのだが、なんでもひどい風邪を引いて自宅から出られない状態らしい。

それなら二人でお見舞いにでもいいのにと思いつつもそれでもそれをどうにか顔に出さず、美香はマンションのママさんネットワークの中での立ち位置を守るために愛想笑いを浮かべ続けていた。

「そういえば潮見さん、あちらの方は歩いてらっしゃるの？」

「あちらの方……ですか？」

「ええ、そう。重要なことよ、夫婦にとって」

「あ、ああ……そっちのあちら、ですか」

下卑た笑みを浮かべる二人の中年女性。

すっかり自分らがご無沙汰になってしまった彼女たちにとっては、まだ若い美香と達也の夜の営みは、覗いてみたくて仕方のない最強のエンタメコンテンツだった。

もちろん、そんなものを簡単に他者に口外する美香ではなかったが。

「そうそう。聞きました、乃木さん」

「なんですの、日向さん」

美香がごまかしている間に、二人の話題は別のものへと変わっていく。

身を乗り出すほどの熱心さで夜の生活について美香に尋ねていたが、結局はその程度の熱意。

やや乾いた笑いを浮かべる美香をよそに、二人はマンション住民に関するゴシップで盛り上がっていた。

「このあたり一帯の地主が、このマンションに住んでるらしいですよ」

「ええ？　ここら一帯って……以前はともかく、最近はかなり地価が上がりましたわよね」

美香はギクリと一瞬表情を固くする。

だがそのわずかな変化には、奥様二人は気づかない。

（もしかしてこの噂話って……うちの旦那さんのこと、かしら）

近年開発が進んできたこのあたり一帯の地主といえ、美香の旦那……達也の曾祖父のことだ。

昨年その曾祖父が亡くなったときに相続で少し揉めて、半分ほどの土地を売り払ったりもしたが、今住んでいるこのマンションが建っているあたりは、いまだに達也の父の持ち物であつたりもする。

その関係もあつて、彼女たち夫婦はこのマンションの最上階に相場よりもかなり抑えた金額で住むことができていたのだったが……。

（バレてないわよね、たぶん）

そういったことが明らかになると、ママさんネットワークの人間関係はとたんに面倒くさくなる。

いままで自分の下にいると思っていた相手が、実はそうではなかった。

そんな風に感じたりすれば、とたんに彼女たちは美香に対する態度を変えるだろう。

虐げてくるか媚びてくるかは、そのときになってみないとわからなかったが。

「で、あなたのところはどなの？　旦那さんのご実家との関係、うまくいつてらっしゃる？」

「え？」

不意に自分に話題が振られて、美香は戸惑ってしまった。

彼女を置き去りにして、ゴシップに盛り上がっていた乃木さんの奥さんと日向さんの奥さん。

どうやら話題は、いつの間にか嫁と実家の関係性についてのものに変わっていたようだった。

「うちはまあ……そうですね。一応、結婚前から知り合いだったのだから」  
言ってから美香はしまったと思った。

どう考えてもそれは、奥様方の大好物の話題に思えたからだ。

「ええっ！　もしかして幼なじみ同士の結婚とか、そういうのだったの！」

「そういえば聞いたことなかったわね。旦那さんとは、どうやってお知り合いになったの？　学生時代からの知り合い？　いつからお付き合ってたの？」

（あちゃー）

できれば杞憂に終わって欲しかった。

だが、そうはいかなかった。

美香はできるだけ個人情報が出ないようにいろいろなものをぼやかしつつ、近所の奥様方とのやや憂鬱な時間を過ごした。

そして日が暮れ、夜になる。

ほぼ定時に会社を出た達也が帰宅するのは、夜の八時を少し過ぎたころだった。

「ただいまー」

「おかえりなさい」

ありきたりなセリフで妻に迎えられる旦那と、旦那を迎える妻。

達也からカバンと上着を受け取り、美香はそれらを手にリビングへと戻っていく。

一方の達也は、ネクタイを緩めながら洗面所へと向かう。

手を洗ってうがいをし、清潔なタオルで手と顔を拭いてから、トイレへと向かう。

「ふー」

ジョロジョロと水音を立てながら、放物線を描いた達也の尿が便器の中に吸い込まれていく。

トイレを流し、再び手を洗う。

そうして寝室へと向かってそこでスーツを脱いで、一日の終了を彼は強く意識した。

「今日はどうだった？」

「ん？ まあ、いつもどおり。そっちは？」

「こっちも大体いつもどおり、かな」

「ま、そんなもんだよね」

「うん」

美香の作ったなかなか手の込んだ夕食の並ぶテーブルを二人で囲みながら、ありきたりな会話を交わす美香と達也。

かなりドライな感じのやり取りではあったが、別に夫婦関係が冷めているとか、そういったことではなかった。

達也は美香のことを彼なりに愛していたし、美香もまた達也を旦那として愛していた。ただ、その愛情表現が薄い方だったただけだ。

二人そろって。

「そういえば、また言われちゃった」

「ん？」

「潮見さんのところはお子さんまだですかって」

「ああ」

デリケートな話題だけに、できるだけ押し付けがましくならないように美香はそのことを達也に話す。

美香と達也には、二歳の差がある。

達也が二十六歳で、美香が二十八歳。



三十路が見えてきてしまった美香としては、そろそろ達也に子作りについて真剣に考えて欲しかったのだ。

もつとも達也の方も、それに関してまったく考えていないわけでもなかった。

昨年あった曾祖父からの遺産相続の騒ぎ。

あれ以来、実家の方からことあるごとにやや遠回しながらも跡取りに関して催促されるようになっていたからだ。

とはいえ、達也はまだ若かった。

自分が子供を持つということに、あまり現実味を感じられなかった。

それに……。

「そうそう。そういえばね、今日お買い物に行ったときに気づいたんだけど……」

黙り込んでしまった達也の反応から、もしかしたら地雷を踏んだかなと判断した美香は、即座に話題を転換してきた。

このあたりの切り替えの早さは、昼間の奥様方との会合の成果かもしれなかった。もつともそんなものは、これっぽっちも美香は嬉しく思っていないなかったが。

「んっ、あ……ああ……あ……」

「……」

夕食から数時間後、二人の姿はリビングにもキッチンにもなかった。  
達也と美香はベッドルームにいた。

「あん、あん、あん、あん、あん、あん、あん」

あまり抑揚のない、それでも一生懸命さは感じられる美香の喘ぎ声。

対する達也の吐息も、決してその行為に対する手抜きがあるようには感じられなかった。  
だが、それはあまり盛り上がっているようには見えなかった。

「んっ、んんんっ：：んっ、んんんん」

どこかマニユアル通りを思わせる達也の愛撫。

キスをして胸に触れ、首元に唇を這わせ、乳首に優しく触れる。

そこから生じる感覚を、それがおそらく快感なのだろうと思いながら、美香は喘ぎ声を上げていた。

食後をまったりと過ごしたあと、特に愛を語るなどすることなく二人は義務的な流れでベッドに入った。

夫婦だからとか、子作りの必要があるからとか、そういったことが二人のベッドタイムの主な理由になってしまっていた。

美香も達也も、あまり性欲が強い方ではない。

達也の場合には少し別の方面にその欲求が割り振られているのだが、美香の方はそうで

はなかった。

「あーん……んっ、あっ……あっ、あああん」

美香にとっては、達也との経験がすべて。

夫婦になった達也との夜の生活で覚えたことが、美香にとってのすべてだった。もっとも、達也の方もそれほど変わりはしなかったが。

「んっ、あ……んんんっ。んっ、んううう。んっ、はっ」

達也のそれは、的確だった。

間違っていることは何一つなかった。

でもそれだけ。

マニユアルを正確になぞるだけの、週に一度の義務的な子作りセックス。

勃起した男性器を美香の女性器に入れて腰を前後に動かす。

「んっ、あっ、んっ、あっ、んっ、あっ、んっ、あっ」

コンドームなしで生挿入された達也のそれが、定規で測ったかのように同じ距離を往来する。

それはリズムカルというよりも、機械的といったほうがいい動きだった。

そして美香の発する声もまた、どこか単調であった。

盛り上がり欠けるセックスが、淡々と続けられる。

とはいえ美香にも達也にも、不満は見られない。

二人にとってはこれだけが知るセックスのすべてだったから。

特に美香は学生時代にもこういう経験をしてこなかったし、この手のことへの興味も人一倍薄かった。

「んっ、ああっ……あ、あ、あ、あ、あ、あ」

それでも徐々に、美香の声は高ぶってくる。

感じていないわけではなかった。

あまり気の入っていない達也の挿入や愛撫でも、美香の身体はそれなりの反応を示していた。

乳首も勃起していたし、クリトリスも充血していた。

ただそこから湧き上がってくる感覚を、性感として捉えられるだけの開発がされていなかったのだ。

「んんんんっ……んっ、ふっ、んっ、はっ、あっ、はっ、あっ、あっ」

達也と結婚するまで、美香は処女だった。

オナニの経験もこれっぽっちもなかった。

そもそも、女性が自分の身体を自分でいじって気持ちよくなるなんてことが実際にあるなんて、信じていかなかった。

友人たちとの会話でそれとなく話題になることがなかったわけではなかったが、それはすべてフィクションの出来事で、絵空事のように捉えていたのだ。

「んっ、ううううっ：：んっ、くっ、うっ、ううううっ」

一方の達也も、状況は似たようなものだった。

ただし、事情は少し異なる。

彼の場合はセックスを現実のものとして捉えていたし、オナニーはごく一般的な若い男性がするくらいの頻度で嗜んだりもしていた。

とはいえ、美香と結婚するまでは童貞だったことも確かだ。

「んっ、くっ、うっ、ふっ、んっ、んっ、んっ、んんんんっ」

達也の息遣いも、少しずつ荒くなってきた。

だがそれは、興奮の極みに達した：：というのとは少し違う。

機械的に腰を動かし続けた結果、美香の中で勃起した男性器をしごかれて、当たり前の生理反応として射精感を催してしまっただのだ。

「あっ、あんっ、んっ、んんっ、ん、ん、ん、ん、あ、あ、あ、あ、あ、あ」

喘ぎ：：というよりは吐息に近い美香の口から漏れる声。

そのペースも、終わりが近いことを示しているかのようにペースが上がっていく。

といっても、美香は絶頂を迎えたことはまだない。

そもそも性的な意味での快感というものがよくわかっていない状態なのだから、当然といえ当然でもあった。

「うっ！」

達也が短く声を漏らし、おもむろに美香の中で射精のときを迎える。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

やや長めのジョギングをしたときのような緩い疲労感が達也の全身を包んでいた。

そこに満足感はあまりない。

夫としての役目を果たした、という意味での達成感は多少あったが、それは強い快感を伴うものではなかった。

そして、美香の方も……。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

やや頬を上気させ、いかにも事後といった雰囲気を漂わせてはいたが、そこにはあるべきものがなかった。

セックスのあとに見られるような快感の余韻。

頬は上気して朱く染まってはいるが、全速力で短距離を走りきったときのような、どこかストイックな雰囲気がわずかに漂っている。

それはほとんど無意識のものではあったが、美香の中ではセックスはスポーツのように

捉えられていた。

夫婦で行われるレクリエーショナルなもの。

なんらかの競技のペア種目、というのが一番近い感覚かもしれない。

すれ違う男性の半数以上が振り返るほどの美貌を備えた美香の数少ない欠点の一つ、年相応の色気に欠けることの原因は、こういった部分にあるのかもしれない。

同年代の女性たちと比べて、美香には性的な成熟度が不足していた。

経験だけでなく、精神的な意味でも。

もしかしたら、一回りほど違うイマドキの女の子たちの方が美香よりもずっと、セクシ  
ャルな存在としては大人なのかもしれない。

もっともそれは、旦那である達也にも当てはまることではあった。

理由の方は、若干異なっていたが。

## 発端

## 覗かれたセックス

「ただいまー」

「おかえりなさ……い？」

いつもよりかなり遅い時間。

旦那の帰りを待っていた美香は、ガチャツと扉が開く音を聞き、リビングから玄関へと駆けつけた。

いつもなら、帰る前に連絡を入れてくれる旦那。

ところが今日はその一報が、彼女のスマホには入らなかった。

まあたまにはそういうこともあるだろうと美香は自分を納得させていたが、見知らぬ誰かに肩を借りている達也の姿を見て、彼女は容易にその答えに辿り着くことができた。

どうやら彼女の旦那は、酔いつぶれてそれどころではなかったみたいだ。

（こんなに飲んで帰ってくるなんて珍しいわ。耳まで真っ赤になって……ごきげんみたいだから何かのお祝い事でもあったのかしら）

ともにコミュ力がギリギリ平均程度で、陰キャでも陽キャでもない美香と達也。

学生時代のスクールカースト的には、どこの層にも属さずに上から下までまんべんなく付き合うタイプだった。



それ故に、社会に出てからでもその手のお誘いは多い。

顔の見栄えがいい二人だけに、集まりにいてももらえるだけでいいと考える幹事が多かったのだ。

美香と達也は、先方との付き合いが切れない程度にはその手の誘いを断らなかった。とはいえ、二人共アルコールに強いわけではない。

それ故に、達也がここまで酔っているのを見るのは美香にとっても珍しいことだった。

「すみません。先輩酔っちゃったみたいで」

「あ、いえ。こちらこそ送っていただいて、ありがとうございます」

美香には見覚えのないやや小太りな男性。

パツと見た感じでは達也と同年代か、少し年上くらいに見えた。

ところが、彼は達也を先輩と呼んだ。

ということとはつまり、彼は達也の職場の後輩なのだろうか。

細かい部分はわからなかったが、とりあえずそのあたりは放置しておいて、美香は達也のケアをすることにした。

「ここからは私が――」

後輩らしき男から達也を引き取るつもりで、美香は彼らの方へと手を伸ばした。

だが、その手が空振りする。

「いえいえ。ちゃんと最後まで僕がお連れしますから」

「そうだー。飲み直しだー」

「先輩、飲みすぎですって」

「なんか文句あんのかー」

「まったく……」

「……」

男は勝手に靴を脱ぎ、玄関を上がってくる。

ベロベロに酔っているようにも見えるが冷静な部分も残っているのか、達也もまたきちんと靴を脱いで後輩に支えられながらリビングへと進んできた。

美香は黙って彼らの靴を揃えてあとに付き従う。

「うぷー」

酒臭い息を吐き出しながら、達也が勢いよくソファに身を沈めた。

ネクタイを乱雑に外しながら、それを後輩に投げつける。

なんでもないような顔でそれを見事にキャッチする後輩。

自宅で見える達也の姿とはかなり違うその様子に、美香は少し驚いた表情を浮かべた。

（意外と外弁慶、なのかしら）

存在するのかよくわからないような言葉を思い浮かべながら、ネクタイに続いて達也が

脱いだ上着を美香は受け取る。

「矢太郎、そっち座れ。遠慮するな」

後輩らしき人、矢太郎さんって言うのね……などと考えながら、美香は達也が脱いだ上着をベッドルームのウォーキングクロゼットへと運んだ。

そこで簡単にシワをとり、ハンガーに掛け、かすかに漂う居酒屋の匂いが残らないように消臭スプレーを掛けてからリビングへと戻った。

「かんぱーい」

ガチャンと達也と矢太郎がコップをぶつけ合う。

わずかにこぼれたお酒が、互いのコップの中で混じり合う。

「ごくごくごくごくごく、ぷはーっ」

美香がいなかったわずかの間に、リビングはすっかり宴会モードに突入していた。

（あんなにお酒、うちにあったかしら）

テーブルの上には何本もの缶ビールやハイボール、ストロング系アルコール飲料が所狭しと並べられていた。

その中の何割かは、美香にも見覚えがあった。

あまり頻繁にはないが、美香も達也と晩酌をすることがたまにある。

そのとき用に買いだめしてあった缶ビールが、おそらく今ふたりが喉に流し込んでいる

よく冷えたビールであろう。

ではそれ以外はどこから出てきたのだろう。

美香が気づかなかっただけで、矢太郎に連れられた達也が持ち帰っていたものなのか、それともキッチンパントリーに以前から達也が買いだめしていたものなのか。

すでに出来上がっている達也の様子からは、美香は判断がつかなかった。

とはいえ、わかっていることがいくつかあった。

それは、達也があまり見たこともないほど上機嫌に気分良く酔っているということと、そんな達也を連れ帰って来てくれた彼の後輩……矢太郎が帰るにはもう時間が遅くなりすぎているということ。

最寄りの駅からは、すでに今日の最終電車が発車してしまっていた。

それとほぼ同じようなタイミングで、バスの最終便も行ってしまったはず。

（これって……そういうことになるのよね）

旦那の意志を確認したわけではなかったが、とりあえずそっちの準備を先にしてからなにか軽く摘むものでも作ろうと、美香はリビングをあとにする。

（客室の掃除をした日でちょうどよかったわ）

お客さま用のシーツをベッドに広げ、旦那の後輩……矢太郎が泊まっていけるように準備をする。

そういえば先方のご自宅に連絡しなくて大丈夫なのかしら、などと思いながら美香は買い置きのパジャマを手にとった。

いくつかあるサイズの中から、矢太郎に合いそうなものを選んで枕元に置く。

さすがに下着の買い置きはないため、そちらは諦めて美香は客室を出た。

（おつまみは何がいいかしら。もう遅い時間だから、胃に残らないようなものがないと思うんだけど……）

微妙にろれつの回らない様子で何かを話し込んでいる達也と矢太郎を横目に見ながら、美香はリビングを横切ってキッチンへと向かう。

達也に食べてもらはずだった今日の夕食のメニューは、ラップに覆われたまま冷蔵庫の中へ。

そしてそのとき同時に、いくつかの食材を美香は冷蔵庫から取り出した。

生ハムにコチュジャン、にんにく……。

彼女が何を作るのかはまだわからなかったが、それとは無関係にリビングの二人は大いに盛り上がっているようだった。

「そう。大きなお仕事がひとつ終わったお祝いだったのね」

「まあ、終わったと言ってもまだまだこれからいろいろやることあるんだけど」

「僕らの仕事はサポート込みですからね」

「ああ」

十数分後、リビングの空気はだいぶ落ち着いたものになっていた。

達也の酔いも一段落したのか、帰ってきたときほどのハイテンションぶりも影を潜めていた。

「来週からのスケジュールどうなった？ 客先常駐は白幡さんだけだっけ？」

「白幡さんとエビの二人です」

「そうか。エビがいるなら大丈夫だな」

仕事の話は美香にはよくわからなかったが、ともかく達也の何かしらの肩の荷が降りたのだろうということとはなんとなく伝わってきた。

そして後輩：：矢太郎が旦那の数少ない友人であろうことも。

（あまり似たタイプには見えないけど：：それがいいのかしら）

美香は失礼にならない程度に、チラチラと矢太郎の様子を観察していた。

達也と違ってずんぐりむっくりとした体型の矢太郎。

自分ではそれほどではないと思っているが、美香と達也は美男美女の美形夫婦として周囲には認知されている。

そんな達也とは、まるで正反対とっていい容姿の矢太郎。

どこかクマを思わせる雰囲気は、ピンポイントに好む人たちもいるかもしれない。

長身で顔が小さく、スタイルのいい達也。

脚も長く、うっすらとついた筋肉がいい感じに腹筋の割れ目を形成している。

平均的な背の高さの矢太郎。

顔が大きく、全体的なバランスを崩している。

手足は短いわけではないが、胴体のボリュームがそれを実際以上に短く見せていた。

服の下がどうなっているのかはわからない。

ダルダルに脂肪がついているという感じはしなかったが、ガチムチの筋肉質という感じもしない。

中肉中背……よりも、若干太め。

もしかすると平均体重よりプラス10キロ程度はあるのかもしれない。

頭にあまり入ってこない旦那とその後輩の会話を聞きながら、美香はそんなようなことを考えていた。

それ故に、美香は自分に話題が振られたことにすぐに気づくことができなかった。

「美香？ 聞いてたか？」

「え？」

達也の声に、美香は我に返る。

我に返るといふよりは、ぼーっとしていた意識が焦点を取り戻した、といったほうが正しいかもしれない。

すでに時刻は0時を過ぎていた。

まあまあ早起きな美香にとっては、もう眠い時間になっていたのかもしれない。

「ごめんなさい、聞き逃しちゃったみたい。なんの話？」

ごまかさずにストレートに聞き返せるあたりが、この夫婦の関係性を表していた。

恋愛結婚ではなく、限りなくお見合いに近い状態で互いの両親からの紹介で結婚した達也と美香。

恋人同士というよりも、人生の同伴者。

尊敬や尊重、気遣いや思いやり、信頼や愛着といったものは存在していたが、その一方で欠落しているものも存在していた。

それは、二人の間に流れる甘い感情。

とはいえ、人並み以上の見た目に反して、そういったものと縁遠い人生を歩んできた二人にとっては、その欠落はそれほど気になるものではなかった。

なにしろ、そういった甘ったるい関係を結んだことがなかったのだから。

そういった意味では、達也と美香は似たもの同士だった。

そういう風な感覚を得るにいたった経緯はそれぞれ違っていたが。



「これだよこれ、これの話をしてたんだ」

そう言って達也は、テーブルの上に広げた粉薬を指差してきた。

アジアチックな風情を感じさせる粉薬。

薄紫色の包装紙に包まれたそれは、どこか神秘的な雰囲気をもっていた。

「なんのお薬？」

「薬っていうかサプリメントっていうか」

「？」

達也の言はいまいちハッキリしなかった。

「エビ……僕と同僚なんですけど、そいつが実家に里帰りしたときのお土産で」

旦那の言葉を引き取るように、矢太郎がその粉薬の説明を続けた。

「エビ……さん？」

美香はそれが実際の名前なのか誰かのニックネームなのかもわからなかった。

達也は普段、職場の話をあまりしない。

矢太郎のことですら、美香は今日始めて知ったくらいだ。

そんな美香を置き去りにして、矢太郎と達也が薄紫の粉薬についての話を続けていく。

「これ、現地では美人薬って呼ばれてるらしくて」

「肌とか髪が綺麗になるんだって」

「まあ、先輩の奥さんはこんなの飲まなくても大丈夫みたいですけど」

いかにも飲んでみると言っているふうに達也がそれを美香に手渡してくる。

ザラツとしたどこか怪しげな手触りの粉薬。

出どころ不明なその粉薬にも美香は不審なものを感じたが、矢太郎が自分を見る目にも若干似たようなものを感じていた。

どこか蛇を思わせる矢太郎の細い目から放たれるねっとりとした視線が、自分の髪や肌、胸や腰のあたりに絡みつく。

それに反応して、ゾワゾワする不快感が自然に身体の内から湧き出てきてしまう。

生理的な反射であるそれは、美香自身の意志では抑え込むことはできなかった。

とはいえ、それを顔に出すほど美香も潔癖ではなかった。

若いころから、そういった視線を向けられることには慣れていた。

男性とはそういうもの。

むしろ、そういった雰囲気をもったく感じさせない達也のほうが珍しい。

出会った当初から、達也のその部分は美香にとっては非常に高く評価するポイントの一つでもあった。

もつとも、それが逆に作用して二人が肉体関係を結ぶのは実際に結婚という段階を踏まねばならなかったが。

「せっかくだから飲んでみてよ」

「え？」

達也が隣に座る美香に、軽く寄りかかってきた。

斜向いに座る矢太郎はその様子をにこやかに……そしてどこか羨ましそうに見ながら少しキモい笑顔を浮かべていた。

「俺の後輩がお土産で買ってきてくれたんだからさ。な？」

コテンと首をかしげるようにしながら、達也が美香に頭をもたせかける。

上目遣いに自分を見る達也の目は、酔いのせいかかすかに潤んでいた。

（ふふふっ。こういうの、甘え上戸っていうのかしら。普段のクールな達也くんもいいけど、甘えてくれる達也くんもかわいいわね）

恋人期間がなかったゆえに、美香は達也とこんなふうにはイチャイチャした経験がまるでなかった。

そこに不満はなかったし、ベタベタするのが苦手だと思っていた美香は、そういうのを達也に求めることもなかった。

だが、実際にしてみると悪くはなかった。

いつもはクールで夫婦といえども一歩引いているような態度をとる達也。

そんな達也が、無防備に自分に身を任せている。

こんな気分が味わえるなら、たまには家で達也が酔うくらいまで飲ませるのも悪くはないかな、などと考えながら美香は達也の差し出す粉薬を手にとった。

「水、どうぞ」

「ありがとう」

チェイサー代わりに用意されていた水を未使用のコップに注ぎ、矢太郎が差し出してくる。

何も考えず、それを受け取る美香。

酔いが回っているせいなのか、いつもよりもとろけたような表情で達也がそれを見ていた。

「じゃあ飲むわね」

薄紫色の包装紙を開いて、中の粉薬を美香はサラサラと口に含む。

吹き出さないように気をつけながら、急いでそれを水で喉の奥に流し込んだ。

「どう？」

「どうって、まだ飲んだばかりじゃない。すぐには効果出ないわよ」

「それもそうか」

スツと達也がもたせかけていた頭を元の位置に戻した。

（あっ……）

失った重さとぬくもりに、妙に寂しさを感じてしまう。

いつもならそんなことを欠片も思ったりしないのに、今日に限ってどうしてこんなふうにと、美香は疑問に思った。

それはおそらく、先程の旦那の甘えのせい。

はじめてのイチヤイチャらしきものは、思っていた以上に美香の心に影響を及ぼしていた。

知らなかっただけで、もしかすると自分はそういうのが好きだったのかもしれない。

うっすらとだが、美香は頭の片隅でそんなことを考えていた。

とはいえ、そういったものを望んでももはや手遅れ。

彼女はそういうのをほとんどしない旦那と結婚してしまったし、そういったイチヤイチャに縁があるような若さもすでに失ってしまった。

そんな諦めの気持ちを心の片隅に抱えている彼女の目の前では、再び彼女の旦那とその後輩が彼女にはよくわからない話を続けていた。

「先月の定期パッチが――」

「無線接続の新しい規格の影響で――」

「エビの親戚が――」

「来期の新作の納期が伸びて――」

「先輩の嫌がってた家虎勢が――」

二人はかなり楽しそうに話していたが、美香にはその内容はさっぱりだった。

さっぱりではあったが、それでもなんとなく楽しかった。

自分の旦那が、そんなに饒舌にしゃべるところを見たのは、ほとんどはじめてだったから。

「奥さん、ちょっと顔赤いですけど……飲みましたっけ？」

「え？」

不意に矢太郎が自分に声を掛けてきた。

いつの間にかぼーっとしていた自分に気づいた美香は、パツと自分の頬に手を当てた。

矢太郎が自分に話しかけているということに気づくにはほんの少しの時間はかかったが、

そこを乗り越えたあとの理解はかなり早かった。

（ほんとだ……なんかちょっと、火照ってるみたい）

自覚すると、その感覚はよけいに強くなってきた。

身体全体がどこか熱っぽい感じがする。

特に下腹部のあたりに、よくわからない熱がこもっているような感じが。

（風邪？　ううん。それとはちよつと違う気が……）

体調自体は悪くないような気がした。

頭が痛かったり、関節がズキズキしたりなど、体調を崩して熱が出たときのような症状は今の所出ていない。

というより、どちらかといえば調子がいいような気がする。

いつもよりも気分がいいし、今なら何でもできそうな気がしていた。

「もしかして酔ってます？　っていうか、飲んでませんよね。確か」

達也と矢太郎は、あれからすでに何杯かコップを空にしていた。

それに付き合っただけで美香も、飲み物は飲んでいない。

ただし、その内容はすべてソフトドリンク。

酔っ払うような、アルコール分は入っていないはずだ。

というかそもそも、普段から生理周期を整える目的で低用量ピルを飲んでいる美香は、お酒それ自体を遠ざけていた。

飲めないわけではないのだが、それほど好きでなかったために自然と縁遠くなっていた。

ここまで考えて美香は、どうして達也が自宅であまり飲まなかったのかを思い出した。

「熱でもあるんじゃないか？　もう遅いし、ここはもういいから寝ちゃったらどうだ？」

ややいつもの調子に戻りつつ、達也がそう言うてくる。

美香は自分がいることで場を冷めさせてはいけなさと、この場を離れることにした。

「それじゃあ私、先に休ませてもらいますね。食器はシンクに入れておいてくだされば、

明日の朝片付けますから」

「了解」

「ほんと突然すみませんでした奥さん。おやすみなさい」

「おやすみなさい」

矢太郎にもそう挨拶し、美香はリビングをあとにする。

着替えの準備をし、バスルームへ。

身体の火照りでうっすらとかいた汗を温度低めのシャワーで流す。

いつもならゆっくりと湯船に浸かる美香だったが、今日は短めにしておいた。

それによって身体 of 火照りが、よけいにひどくなりそうな気がしたからだ。

そして脱衣所に戻り、バスタオルで身体を拭いて新しい下着を身につける。

シルクのパジャマに袖を通し、髪に残った水気をタオルで吸い取りながら寝室へと戻った。

そのころリビングでは……。

「水くれ」

「どうぞ」

達也と矢太郎の間に流れる雰囲気ガラッと変わっていた。



「あれ、薬の効果だと思うか？」

「どうでしょう。雰囲気酔っただけって可能性もあると思いますけど」

「まあそうだな」

達也には先程までの酔っているような様子はまったくなかった。

口調もしっかりしていて、動きもフラついていない。

それは酔いが冷めたというよりも、最初から酔っていなかったといった方がいいような感じもかなり強かった。

もつとも、そのことをツッコむような人間はこの場には一人もいなかったが。

「それじゃあこのあとは予定どおりで」

「ああ。お前は客室のベッドが準備してあると思うから、そこで寝てくれ」

「わかりました」

\*

\*

\*

強いシャワーの流れが、わずかに残った達也の酔いを完全に冷ましていく。

もはや、頭の芯にうつすらと重いような感じが残っているだけ。

もともとそんなに飲んでいたわけではなかったが、今日のこのことがいつもよりも達也の酔いを深くしていた。

とはいえ、一人で帰ってこれないほどには飲んでいなかったが。

「ふう」

ゴシゴシと頭をタオルで拭きながら達也がバスルームを出る。

寝る前に美香が用意しておいてくれた下着に脚を通し、美香とおそろいのシルクのパジャマを身につける。

脱衣所を出て寝室へ。

途中リビングにいる矢太郎が一瞬視界に入る。

また飲み直していたのか、持っていたハイボールの缶を掲げながら、弥太郎は軽く会釈をする。

後輩からの挨拶には視線だけで返事をし、達也は寝室へと入る。

「達也くん？」

うつすらと常夜灯の明かりが付けられたベッドルームで、美香はまだ眠りについていなかった。

本を読むでもスマホを見るでもなく、ただ布団の中でもぞもぞと動いていた。

まるで、身体の内側から湧き上がってくる熱に浮かされているかのように。

「まだ寝てなかったのか？」

布団をめくり、美香の隣に達也が入ってくる。

（？）

そのとき達也の視界に、いつもとは違う光景がスッと滑り込んできた。

（珍しいな。いつもは几帳面なくらいちゃんとしてるのに）

そのいつもとは違う光景とは、布団の中の美香の姿だった。

いつもならきっちりとパジャマを着込んでいる美香。

寝るときにお腹が冷えるからといって、裾をズボンの中に入れるほどの徹底ぶり。

それが今日は、かなり乱れていた。

裾はもちろんズボンには入っていなかったし、いつもは全部閉じられているボタンも一番上と一番下が、不自然に外されていた。

まるで、そこから手でも入っていたかのように。

「あの人は？」

いつもより近い距離で、美香が達也にささやきかけてきた。

耳元をくすぐる妻の問いかけに、達也も小声で答える。

「飲んでるうちに寝ちゃったから客室に押し込んできた」

「そう。寝ちゃったのね」

「ああ」

矢太郎のことを確認すると、美香がさらに身を寄せてきた。

それがどういう意味をもつ行動か、当然のことながら旦那である達也は気づいていた。

それは、美香からの控えめな誘いの合図。

もしそれで達也の方がOKならば、そのまま美香の方に向き直ってキスをするのがいつもの流れ。

だが、今日の達也はそうしなかった。

といっても、別にOKじゃなかったわけではない。

むしろ美香のその行動は、達也にとって望むところだった。

ではなぜ、達也の方から受け入れなかったのか。

それは、美香のそれ以上の行動を望んでいたから。

焦らすことによって、さらに美香の気持ちを高めたかった。

そしてそんな達也の目論見どおりに、今夜の美香は自分自身の欲求を持て余し気味なようだった。

「達也くん……えっと、その……」

達也の肩に顔を埋めるようにしながら、美香がささやきかけてくる。

その瞳は潤み、頬は紅潮し、リビングで矢太郎たちから指摘された身体の火照りはまったく収まっていなかった。

それどころか彼女の身体は、内側からの熱でさらに炙られ、自分でも制御不能なほどに高ぶってしまったようだった。

「……」

あえて無反応を貫く達也。

旦那がまだ自分の誘いに気づいていないのかと、美香はさらにアピールを激しくする。達也の腕にすがりつき、脚を絡めていく。

普段は恥ずかしがって絶対にしないようなこと……旦那の股間に手を伸ばすようなことまでした。

「今夜はダメだ。矢太郎が泊まってるんだぞ？」

自分の股間に触れそうになった美香の手を止め、しっかりとした口調で釘を刺す達也。しかしながら今夜の美香は止まらない。

もつとも、そうしたのは彼女を止めようとしている達也自身でもあったのだが。

「もう寝ちゃってるのよね？　それに客室とここは離れてるし、声が出ないようするから……ね？」

美香がここまで食い下がることは珍しい。

というかそもそも、美香の方から求めてくるなんてことはほとんどない。

達也と美香の夫婦の営みは、ほぼ義務感で繰り返されてきたものであって、今夜のようにどちらかが欲求に駆られて求めてくる、なんてことはこれまで一度もなかったのだから。

達也はまるで美香の求めに根負けしたといった風を装って、彼女の求めに応じた。

「まったく……しやうがないな」

妻の方に向き直り、いつもよりも艶が増しているような唇に自分の唇を重ねていく。

「ん……」

そのキスは、美香にとって衝撃的だった。

もちろんファーストキスなのではない。

だが、それがまるで人生最初のキスであるかのような激しい感覚を彼女は味わっていた。

もしかするとそれは、本当のファーストキスのときよりも彼女の気持ちを激しく揺さぶっていた。

（すごい……今日の私、やっぱりなにか変……キスしただけなのに……軽く唇を合わせただけなのに……こんな……）

美香は今夜の自分がおかしいことを自覚していた。

全身が熱っぽく、身体の奥がうずくような感じがしてじっとしていられない。

頭はボーッとしているのに感覚は妙に研ぎ澄まされていて、特に触感は今までにないほどに鋭敏になっていた。

シャワーを浴びているときは水滴の一粒一粒が感じ取れたし、シルクのパジャマの肌触りはいつも以上にサラサラと肌の上を流れるようだった。

布団に入ってもその変化は収まらなかった。

布団の重みや肌触り、わずかなベッドの軋みですら彼女には感じ取ることができた。

「んっ、あ……あああ……」

達也の手が、そんな敏感になった美香の胸に触れる。

まだパジャマ越しではあったが、美香にはいつも以上にその手のぬくもりや柔らかさが感じ取ることができた。

いつもはほとんど出ることのない声が、今日はかつてに溢れ出してきてしまった。

「声、出てるぞ」

そのことを達也が指摘する。

「ごめん、なさい……なんだか今日は……んんっ。すごく敏感で……あっ、んっ」

口元に手の甲を押し付け、漏れ出る声を抑えようとする美香。

だがそれは、ほとんどどうまうかない。

止むことなく続けられる達也の愛撫が、いつも以上に美香の身体に痺れるような感覚を生み出していた。

「んっ、ふっ……んんんっ。くっ、うううっ！」

ピクピクと美香の身体が震える。

それはいつものセックスとはまるで違っていた。

どうしてそんな風になるのかはわかつてはいなかったが、ともかく違うことだけは美香

にもわかった。

そんな美香の様子を観察しながら、こちらはいつものように冷静さを保ったまま達也は美香のパジャマのボタンを外していく。

「んっ、んんっ」

達也の手が美香の肌に直に触れる。

（なるほど）

いつもなら達也の手には、サラサラとしたきめの細かい肌の感触が返ってくる。しかし、今夜は違っていた。

じつとりと汗ばんだ美香の肌が、達也の手に吸い付いてくる。

彼女の火照りを表すかのように、いつもより熱を帯びた美香の肌。

しっとりとした感触のそれを、達也は軽く爪を立ててなぞった。

「あ、あ、あ、あ、あ、あ」

美香が白い喉を晒しながら、軽くのけぞる。

長い髪がさらりと背中側に垂れ、やや汗ばんだ甘い香りが達也の周囲に漂ってくる。

男の本能を刺激するその香りは、これまで美香が一度も発したことのないものだった。

――達也には、あまり効果はなかったが。

「ね……そろそろ、いい？ 達也くんのも、大きくなってきた、よね？」



美香の手が、旦那の股間に触れる。

確かにそこは、ふっくらとボリユームを増していた。

ただそれは、達也のマックス状態ではない。

とはいえ、挿入は可能だ。

彼は美香のパジャマズボンと下着を脱がしていく。

美香もまた、旦那のズボンとトランクスを脱がしていく。

あらわになった女性器と男性器。

美香は旦那の腰の上にまたがるようにして、自分の中へと勃起した達也のペニスを迎え入れた。

「んっ、んんっ…ああああ」

鼻にかかった甘い声が、美香の唇から漏れ出る。

対面座位で繋がった美香と達也。

彼女は旦那に抱きつくようにしながら、ゆっくりと腰を動かし始めた。

「んっ、んっ、んっ、んっ、んっ、んっ、んっ、んっ」

それは喘ぎ声というには、かなり抑えられたものだった。

とはいえいつもよりは、だいぶ甘い声が漏れている。

客室で矢太郎が寝ているということ覚えていたのか、美香は漏れ出る声をどうにか抑

えようとしていたようだ。

もつともそれはいつもと違う感覚のせいで、あまりうまくいってはいなかったが。

（こうなるのか……）

一方の達也は、特に変わりもなくいつもどおりだった。

美香が自分から動くことなどこれまでほとんどなかったから、その部分については少し驚きもあったが、それでも今回のセックス自体が彼になんらかの変化をもたらしたりはしなかった。

彼は相変わらず、美香とのセックスからそれほどの高ぶりを感じることができなかった。

「んっ、はっ、あっ、はっ、あっ、はっ、あっ、あっ」

抑えた吐息を漏らしながら、美香が達也の上で腰をくねらせている。

おそらく美香にとっては、今夜のこの体験が今までで一番セックスらしいセックスと言っても過言ではないだろう。

しかしそれでも、世の同年代の女性たちからすると、かなり拙い腰の動きではあった。もしもつと巧みに腰が使えていたら、もっと膣やクリトリスの感覚に身体が慣らされていたら、彼女は今以上の快感を今夜の経験から得ることができていただろう。

だが、今の彼女は欲求だけが先走る状態になっていて、感覚の方は空回りしているような状態だった。

なにかいつもと違う感覚はとりあえず得ている。

だがそれが何なのかは、これっぽっちもわかってはいない。

もっと深く感じるためにはどうすればいいのか。

感じた快感の欠片のようなものを、どうすればすぐに手放さずに掴み続けることができるのか。

そういったセックスにおける技量が彼女には決定的に欠けていた。

しかしそれでも今夜の彼女がしていることは、これまで以上にセックスらしいセックスであり、彼女の意識していない外部要因があったとはいえ、彼女の興奮度は今まで味わったことのないほどの高さに達していた。

だからだろう。

これまで嫌がっていた体位をとることに、彼女がなんのためらいも覚えなかったのは。

「そっち、背中向けて」

「こう？」

「そう」

頬を上気させた美香と、いづれどおりの達也。

そこには違和感しかなかったが、それを気にする者はこの部屋の中にはいなかった。

「それで四つん這いになって、お尻はこっちで……」

「え、これって……」

「前に嫌がってたけど、今日もそうなのか？」

「う、うん……そうじゃないけど」

「なら入れるぞ」

ベッドの上で四つん這いになる美香。

形のいい彼女のおしりに手をかけて、背後から達也がのしかかる。

いわゆる後背位の体勢。

動物の交尾を思わせる体位で、夫婦は再び合体した。

「んんんんっ」

未発達な美香の膾内感覚では、それはおぼろげにしか分からなかった。

しかし、何かが違う程度のことでは感じ取れた。

挿入角度の違いによる、当たる部分の違い。

それによって生み出される快感は変化した、それに気づけるほどの経験が美香にはま

だ  
な  
か  
つ  
た  
。

もちろんそれは、達也の方と同じだ。

「んっ、はっ、あっ、はっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ」

リズムカルに腰を振る達也。

実際には当たる角度や美香の締め付けが変化していて、彼の男性器に加えられる刺激もいつもとは違っていたのだが、彼の表情からはそれを読み取ることができない。

いつもよりも気持ちいいのか、それともいつもと変わらないのか。

ともかくわかることは、彼はいつものように淡々と腰を振り続けているということだけだった。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ」

美香の声がほんの少しだけ上ずってくる。

それは明らかに快楽の響きを帯びていたが、美香自身はそれを自覚してはいなかった。彼女の中にあっただのは、セックスをしなればという妙な焦りと、今しなければもったいないという謎の感覚。

きちんと性的に成熟していればそれらの感覚が何なのか自分で判断できたかもしれないが、今の彼女にそれは不可能だった。

ただ、お腹の減った犬のようにがつつくだけ。

しかもがつつく対象である達也の方も、それほどセックスに堪能ではなかった。

「んっ、んっ、んっ、んっ、んっ、んっ」

達也の腰振りとシンクロするように、美香の口から声が漏れる。

微妙な変化ではあったが、それが徐々に早まっていた。

そしてそれは、達也の絶頂が近いことを示していた。

「んんっ！」

短く声を漏らしながら、達也が美香の一番深い部分に中出しした。

生で出された達也の精液は、美香の膣から子宮へと流れ込んでいく。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、はあっ」

達也が動きを止めたことから、行為の終わりを感じ取る美香。

いまだ美香は絶頂に達してはいなかったが、それでもこれが彼女たち夫婦のセックスのかたちだった。

達也の射精が終わりの合図。

機械的に腰を動かし続ければ到達できる男性の射精が、彼女たちに到達できる限界点。

美香がイクところまで彼女を導くのは、達也にはまだ難しかった。

\* \* \*

「え？ うそ。あれで終わり？」

そんな達也たち夫婦を、扉の外から見つめている目があった。

彼は構えていたスマートフォンを操作して録画を停止し、その光が部屋の中に差し込まないように気をつけながら後ろ手で尻ポケットにそれをしまった。

「先輩もあれだけど、奥さんの方もまだまだ未発達って感じなんだな」

それは、客室で寝ているはずの矢太郎だった。

スマホをしまったのとは、反対の手がモゾモゾと股間で蠢いている。

その手が触れている部分には、彼の邪な気持ちがつつぷりとつまった膨らみが存在していた。

「もったいない。もったいないなー。あんなに美人な奥さんちゃんとイかせてないなんて、ホントにもったいないよなー」

矢太郎の三白眼が、視線で美香の身体を舐め回す。

「幸薄めだけどはつきりした顔立ちの美人。巨乳とまではいかないけど、それなりの大きさの形のいい柔らかそうなバスト。乳輪はやや大きめでめちゃくちゃエロい。くびれもあるし、ちよつとデカめのケツも最高。いやあ、本当にもったいない」

口の中にたつぷりと湧き出てきた涎を飲み込みながら舌なめずりし、頭の中で矢太郎は美香を何度も犯す。

片手でモゾモゾといじられ続けている股間のその凶悪な膨らみは、達也のものとは比べ物にならなかった。

「いやあ、本当にもったいない」

（続きは本編で）